

初対面時の会話において部屋の環境が発話 および印象に及ぼす影響¹⁾

黒川 光 流

要 約

本研究の目的は、初対面の2者による会話状況において、座席の配置および部屋の明るさが発話および会話相手の印象に及ぼす影響を検討することであった。座席の配置(対面, 90度, 180度)および部屋の明るさ(明, 暗)を操作し、6条件を設定した。被験者は男子大学生60名であり、各条件に10名ずつ無作為に割り当てられた。被験者は個別に、初対面の女性実験協力者1名と会話を行った。明るい部屋では、対面の位置に着席するとコミュニケーションは活発であったが、会話相手の印象は良好でなかった。一方、並んで着席するとコミュニケーションは活発でなかったが、会話相手の印象は良好であった。暗い部屋では、逆の結果が得られた。

キーワード：初対面時の会話, 発話, 印象, 座席の配置, 部屋の明るさ

問 題

対人関係の形成・進展とコミュニケーション

人はコミュニケーションを介して他者との関係を構築する。親密なコミュニケーションが積極的に行われれば、その関係は肯定的に評価され、良好なものに進展していく(Altman, 1973; Altman & Taylor, 1973)。すなわち、活発なコミュニケーションは、対人関係の親密化を促進する重要な要因の1つであると考えられる。特に新しい対人関係を形成する段階では、相手を理解するために、コミュニケーションが活発に行われる必要があることが示唆されている(楠見, 1988)。

また、人と人が初めて出会った際には、短時間のうちに、お互いが相手に対する印象を形成し、これからその相手との対人関係を進展させていく否かの判断が行われる(宮原, 1992)。互いが良い印象をもつことは親密な関係の形成に寄与するだけでなく、その後のコミュニケーションを活性化することも示唆されている(黒川・若林, 2003; Worthy, 1969)。従って、見知らぬ2者が初めて対面する際には、互いが活発なコミュニケーションを行うことと同時に、相手に対して肯定的な印象をもつことが、その両者の関係を進展させ、良好なものにするため

に重要であると考えられる。

コミュニケーションおよび印象を規定する部屋の環境

コミュニケーションの活発さ、あるいは相手に抱く印象を規定する要因には、性別や生理的喚起水準などの個人要因、ならびに関係の親密さや社会的地位などの関係性の要因の他に、部屋の環境や話題などの状況要因がある(深田, 1998)。

Chaikin, Derlege, & Miller(1976)は、室内の調度などが整った暖かい感じの部屋と、何も置いていない建築途中のような冷たい感じの部屋それぞれで擬似的なカウンセリング場面を設定し、コミュニケーション行動の比較を行った。その結果、暖かい感じの部屋の方が冷たい感じの部屋よりも、親密なコミュニケーションが積極的に行われることが示唆された。この他にも、快適な環境の部屋で行われる会話は、相対的に長くてポジティブであることがいくつかの研究で示されている(Sundstrom & Sundstrom, 1986 黒川監訳, 1992)。特に社会的地位などの関係が成立しておらず、関係の親密さの程度が低い初対面の2者にとって、会話を行う部屋の環境はコミュニケーションの活発さ、あるいは印象形成に重要な役割を果たしていると考えられる。

座席の配置 部屋の環境を構成する基本的な要素にはいくつかあるが、その1つに座席の配置がある。人は容易に近づける他者との接触を好む傾向にある(Gerstberger & Allen, 1968)。また、会話者同士の近接性が高まると、会話が增多することが示唆されている(Sundstrom & Sundstrom, 1986 黒川監訳, 1992)。その結果として、近くに座った者同士は交流の機会が多く、友人になる傾向にある(Gullahorn, 1952; Homans, 1954; Szilagyi & Holland, 1980)と考えられる。また Kahn & McGauhey(1977)は、初対面の男女に2種類の距離で会話させ、相手に対する印象を評価させた。その結果、男女とも近くで話した異性により肯定的な印象を抱いていた。一方 Aiello & Thompson(1980)は、会話を行う2者間の距離が遠いほど不快を経験し、相手を冷たいと感じることを示している。

しかし、コミュニケーション場面における座席の配置には、距離以外にもいくつかの側面がある。例えばカウンセリングでは、クライアントが話しやすい環境を作るために、クライアントの緊張や気分などの状態に合わせて、カウンセラーとクライアントが向き合う角度を変えらるると言われている。

Sommer(1969)は、四辺の短い方に1人、長い方に2人座れる大きさの矩形テーブルを用い、課題の種類によって図1に示す座席の配置のいずれが好まれるかについて調査を行った。その結果、会話を行う場合、AとBの配置が好まれた。特にAの配置は、アイ・

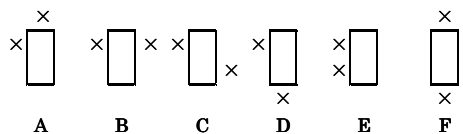


図1 Sommer(1969)が用いた座席の配置

コンタクトを交わしたり避けたりできるため、会話のための座席の配置として好まれることが示唆されている (Sommer, 1959, 1962; Sundstrom, 1984)。また、協力して作業を行う課題では E の配置が最も好まれた。さらに加藤(1986)は、これらの座席の配置によって、両者の関係がどのようにイメージされるかに関する調査を行った。その結果、A の配置は話しやすい気楽な雰囲気、B の配置は対等な関係、C の配置はお互いに干渉を合わない関係、D の配置はお互いに独立な関係、E の配置は親しく近い関係で協力しやすい関係、F の配置は相手の様子は分かるがお互いに親しくない関係というイメージであった。

以上のように、両者が向き合う角度によって、会話のために好まれる程度だけでなく、両者の関係の捉え方が異なっている。2者間の距離の側面からは、最も距離の近い E の配置によってコミュニケーションは促進されると考えられる。しかし、会話のために最も好まれるのは A の配置である。それに加え、A の配置は話しやすい気楽な雰囲気であるとイメージされることから、コミュニケーションの活性化に最も効果的であると予想される。すなわち、単に2者間の距離だけでなく、両者が向き合う角度もコミュニケーションの活発さや相手に抱く印象に影響を及ぼす座席の配置の要素として検討する必要がある。

部屋の明るさ 座席の配置の他に、部屋の環境を構成する基本的な要素として部屋の明るさが挙げられる。部屋が暗い場合、没個性化により人の行動は影響を受けることが示唆されている (Hogg & Abrams, 1988)。Gergen, Gergen, & Barton (1973) は、暗い部屋にいる男女は、タッチングなど、通常はある程度抑制されている親密な行動をとりやすいことを示している。また Carr & Dabbs (1974) は、部屋の明るさが会話の親密さに及ぼす効果を検討した。その結果、暗い部屋では会話の親密さが高まることが示された。Gifford (1988) も同様に、暗い部屋ではプライベートな会話が促進されることを示唆している。

以上のように、部屋の明るさも部屋の環境の1つとして、コミュニケーションの活発さや相手に抱く印象に極めて重要な役割を果たしていると考えられる。特に未知の者同士が会話をする場合、明るい部屋では覚醒水準が高まり、自意識過剰にさらされることも示唆されており (Mehrabian, 1971 岩下・森川訳, 1981)、明るい部屋よりも暗い部屋でコミュニケーションは活発になり、また両者の関係を親密なものと捉え、相手に対して良好な印象を抱くと予想される。

目的

先述したように、新たな関係を構築する段階である初対面の2者にとって、部屋の環境はコミュニケーションや相手に抱く印象に重要な役割を果たしていると考えられる。しかし、部屋の環境を構成する要素を個別に取り上げ、その効果を検討した研究は数多くあるが、それらを組み合わせた効果を検討した研究は少ない。そこで本研究では、部屋の環境として座席の配置および部屋の明るさを取り上げ、それらの組み合わせが初対面の2者による会話状況において、

コミュニケーションの活発さ示す指標の1つである発話および会話相手の印象に及ぼす影響を検討する。

方 法

被験者

18歳から25歳の男子大学生60名。各被験者は個別に、初対面の女性の実験協力者1名と会話を行った。

要因計画

座席の配置3水準(対面, 90度, 180度) および部屋の明るさ2水準(明, 暗) の2要因計画であった。2要因ともに被験者間要因であり, 各条件に10名ずつ被験者を無作為に割り当てた。

座席の配置 座席の配置は, Sommer(1969)および加藤(1986)を参考に, 60cm×120cmの矩形テーブルおよび2つの椅子を, 白い布で四方の壁を覆った260cm×420cmの実験室中央に配置することで設定した。各条件の座席の配置を示したのが図2である。各条件とも, 被験者は120cmの辺の矩形テーブルに向かって左側の位置に着席した。対面条件では, 実験協力者は被験者の向かい側の辺に, 被験者と対面して着席した。

90度条件では, 実験協力者は被験者の左側の60cmの辺に, 被験者と90度の角度で着席した。180度条件では, 実験協力者は被験者と同じ側の辺の右側に, 被験者と180度の角

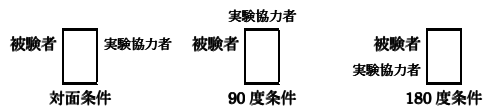


図2 座席の配置

度で着席した。被験者の体の中心から実験協力者の体の中心までの距離は, 対面条件130cm, 90度条件115cm, 180度条件70cmであった。

部屋の明るさ 照明に電球色の蛍光灯を用いて部屋の明るさを設定した。明条件は2170ルクス, 暗条件は85ルクスとした。

実験協力者

印象を統制した21歳から24歳の女子大学生5名。

印象の統制方法 本研究への協力を承諾した女子大学生9名それぞれについて, 上半身の写真を撮影した。無作為に抽出した男子大学生10名に撮影した写真を1枚ずつ提示し, 特性形容詞尺度(林, 1978)を用いて各女子大学生の印象を7段階で評定させた。評定者ごとに「個人的親しみさ」10項目, 「社会的望ましさ」5項目, および「力本性」6項目の平均値を算出し, それらを印象の指標とした。9名の女子大学生それぞれについて, 3つの指標の平均値を算出し, それらを各女子大学生の印象得点とした。3つの印象得点それぞれの9名分の平均値および標準偏差を算出し, 平均値に標準偏差を加えた値を上限値, 平均値から標準偏差を引いた値を下限

値に設定した。「個人的親しみやすさ」および「社会的望ましさ」が上限値以上の者1名、「社会的望ましさ」および「力本性」が上限値以上の者1名、「個人的親しみやすさ」および「力本性」が下限値以下の者1名、および3つの印象得点がすべて下限値以下の者1名の合計4名が実験協力者から除外された。

実験協力者の発話、視線、および身振りの統制 被験者からの発話が優先され、実験協力者の相槌や応答以外の発話は、沈黙が5秒以上続かない限り行われなかった。被験者の発話中、実験協力者は視線を被験者の顔に向け、その他の場合も可能な限り被験者の方に視線を向けた。また実験協力者は、不自然にならない範囲で、可能な限り身振りを行わなかった。

会話内容

会話内容は、大坊(1977)を参考に、どのような被験者でも話しやすいと考えられる「食べ物の好き嫌いについて」を用いた。

手続き

1. 実験者は白衣を着用し、部屋の明るさの条件に従って予め実験室の明るさを設定した。
2. 実験室に入室前、実験者は被験者と実験協力者とを対面させ、初対面であることを確認した。その後、服装による影響を統制するため、被験者と実験協力者は白衣を着用した。また、被験者には「初対面の2人がある話題について話すときに、どのように話を進めていくのかをビデオで撮影して調査する」ことが告げられた。
3. 実験室に入室後、被験者は実験協力者と互いに姿の見えない場所で、実験協力者の印象を評定した。
4. 評定終了後、座席の配置の条件に従って、被験者と実験協力者は着席した。その後、実験者は「今から10分間、2人で会話をしていただきます。その間私は退室し、10分経ったら再び入室します。会話の内容は"食べ物の好き嫌いについて"です。この話題からそれないように注意してください。」と教示し、ビデオの録画操作の後、退室した。
5. 10分後、実験者が入室し、会話を終了させた。その後、被験者は実験協力者と互いに姿の見えない場所に移動し、実験協力者の印象を評定した。
6. 評定終了後、ディブリーフィングを行い、実験を終了した。

測度

発話 発話の指標として、被験者と実験協力者の10分間の会話において被験者が発話した時間の合計である「総発話時間」、被験者が発話を行った回数である「発話頻度」、および被験者の1回あたりの発話時間である「1発話時間」を用いた。

測定は、実験者1名および本研究の目的を知らない評定者2名が個別に、実験中に撮影したビデオを見ながら行った。なお、総発話時間は秒単位で測定した。また、発話頻度の測定の際、被験者の発話の実験協力者の相槌などで一瞬途切れても、間を置かずに再開した場合には、1

回としてカウントした。1発話時間は総発話時間を発話頻度で除すことで求められた。3名の測定一致率は82.8%と高い値が得られたため、一致しなかったものについては実験者のものを採用した。

印象 印象には相手のパーソナリティなどの特性に対する印象と、相手に対する好悪に関する印象とがある。本研究では、特性に対する印象として「親しみやすさ」、好悪に関する印象として「魅力」を用いた。

親しみやすさの測定には、林(1976)の特性形容詞尺度のうち個人的親しみやすさ因子の10項目を用い、被験者に「全くそう思わない」から「非常にそう思う」の7段階で評定させた。各項目とも、評定値が高いほど親しみやすさが高くなるように1点から7点の得点を与え、10項目の平均値を親しみやすさの得点とした。

魅力の測定は、Byrne(1971)のIJSを参考にして、「会話相手を個人的に好きになれる感じがする」および「会話相手と実験で一緒に働くのは楽しい」の2項目に対して、被験者に「1. 全くそう思わない」から「7. 非常にそう思う」の7段階で評定させた。2項目の評定平均値を魅力の得点とした。

結 果

発話

各条件による発話の差異を検討するため、座席の配置(対面, 90度, 180度)および部屋の明るさ(明, 暗)を独立変数、発話の各指標を従属変数として2要因分散分析を行った。

総発話時間 各条件における総発話時間の平均値を示したのが図3である。総発話時間については、座席の配置と部屋の明るさの有意な交互作用が認められた($F=7.50$, $df=2/54$, $p<.01$)。下位検定の結果、対面条件では、暗条件と比較して明条件の総発話時間が有意に長かった($p<.05$)。一方、180度条件では、明条件と比較して暗条件の総発話時間が有意に長かった($p<.05$)。また、明条件では、180度条件と比較して対面条件の総発話時間が有意に長かった($p<.05$)。一方、暗条件では、対面条件と比較して90度条件および180度条件の総発話時間が有意に長かった($p<.01$, $p<.05$)。すなわち、被験者と実験協力者が対面して着席した場合、被験者の総発話時間は明るい部屋で長く、暗い部屋で短かった。一方、180度の場合の総

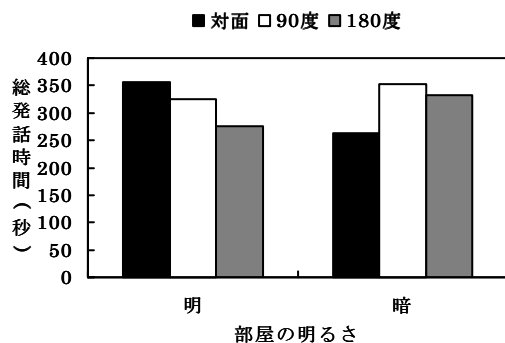


図3 各条件における総発話時間

発話時間は明るい部屋で長く、暗い部屋で長かった。

発話頻度 各条件における発話頻度の平均値を示したのが図4である。発話頻度については、座席の配置と部屋の明るさの交互作用に有意傾向が認められた ($F=2.88, df=2/54, p<.10$)。下位検定の結果、180度条件では、暗条件と比較して明条件の発話頻度が多い傾向にあった ($p<.10$)。また、暗条件では、180度条件と比較して対面条件の発話頻度が多い傾向にあった ($p<.10$)。すなわち、被験者と実験協力者が180度の角度で着席した場合、被験者の発話頻度は明るい部屋で多く、暗い部屋で少ない傾向にあった。

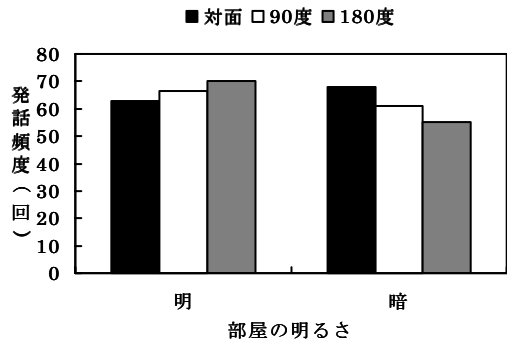


図4 各条件における発話頻度

1発話時間 各条件における1発話時間の平均値を示したのが図5である。1発話時間については、座席の配置と部屋の明るさの有意な交互作用が認められた ($F=6.03, df=2/54, p<.01$)。下位検定の結果、対面条件では、暗条件と比較して明条件の1発話時間が長い傾向にあった ($p<.10$)。一方、180度条件では、明条件と比較して暗条件の1発話時間が有意に長かった ($p<.05$)。また、暗条件では、対面条件と比較して90度条件および180度条件の1発話時間が有意に長かった ($p<.05, p<.05$)。すなわち、被験者と実験協力者が対面して着席した場合、被験者の1回あたりの発話時間は明るい部屋で長く、暗い部屋で短い傾向にあった。

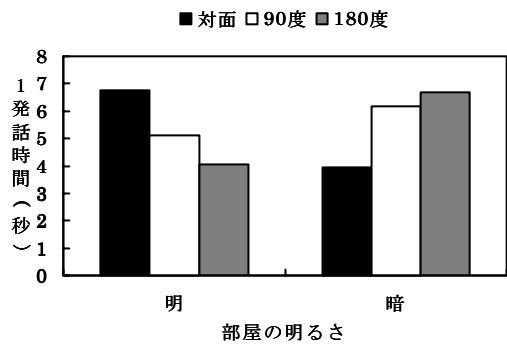


図5 各条件における1発話時間

一方、180度の場合の1回あたりの発話時間は明るい部屋で長く、暗い部屋で長かった。

印象

各条件による会話相手の印象の差異を検討するため、座席の配置(対面, 90度, 180度)、部屋の明るさ(明・暗)、および評定期(会話前・会話後)を独立変数、印象の各指標を従属変数として3要因分散分析を行った。

親しみやすさ 各条件における親しみやすさの平均値を示したのが図6である。親しみやすさについては、部屋の明るさの有意な主効果が認められ ($F=7.69, df=1/54, p<.01$)、明条件と比較して暗条件の親しみやすさが有意に高かった。また、評定期の有意な主効果が認められ ($F=59.15, df=1/54, p<.01$)、会話前と比較して会話後の親しみやすさが有意に高かった。す

なわち、被験者は明るい部屋よりも暗い部屋で実験協力者に親しみやすさを感じていた。また、会話を行うことで被験者が感じていた実験協力者の親しみやすさは強くなっていた。

さらに、有意な2次の交互作用が認められた ($F=4.97, df=2/108, p<.05$)。下位検定の結果、会話前の90度条件および180度条件では、明条件と比較して暗条件の親しみやすさが高い傾向にあった ($p<.10, p<.10$)。すなわち、着席する前であっても、暗い部屋で印象を評定すると、被験者は実験協力者の親しみやすさを強く感じる傾向にあった。

会話後の対面条件では、明条件と比較して暗条件の親しみやすさが高い傾向にあった ($p<.10$)。また、会話後の明条件では、対面条件および90度条件と比較して180度条件の親しみやすさが高い傾向にあった ($p<.10, p<.10$)。さらに、対面条件における暗条件では、会話前と比較して会話後の親しみやすさが有意に高かった ($p<.05$)。90度条件における明条件では、会話前と比較して会話後の親しみやすさが有意に高かった ($p<.05$)。180度条件における明条件では、会話前と比較して会話後の親しみやすさが有意に高かった ($p<.05$)。すなわち、被験者が感じていた実験協力者の親しみやすさは、被験者と実験協力者とが対面して着席した場合には暗い部屋で会話をすることで、90度あるいは180度の場合には明るい部屋で会話をすることで強くなっていた。

魅力 各条件における魅力の平均値を示したのが図7である。魅力については、座席の配置の主効果に有意傾向が認められた ($F=2.99, df=2/54, p<.10$)。多重比較の結果、90度条件と比較して180度条件の魅力が高い傾向にあった ($p<.10$)。また、部屋の明るさの有意な主効果が認められ ($F=4.44, df=1/54, p<.05$)、明条件と比較して暗条件の魅力が有意に高かった。さらに、評定時期の有意な主効果が認められ ($F=86.20, df=1/54, p<.01$)、会話前と比較して会話後の魅力が有意に高かった。すなわち、被験者と実験協力者が180度の角度で着席した場合、被験者は実験協力者に魅力を感じる傾向にあった。また、被験者は明るい部屋より暗い部屋で実験協力者に魅力を感じており、また、会話を行うことで被験者が感じ

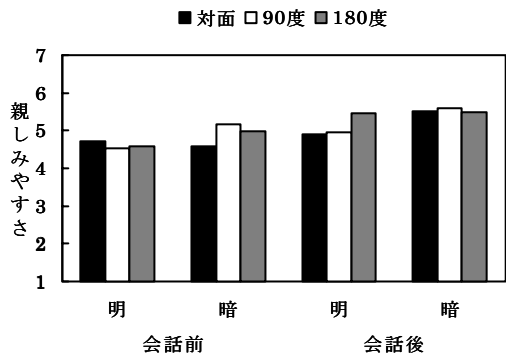


図6 各条件における親しみやすさ

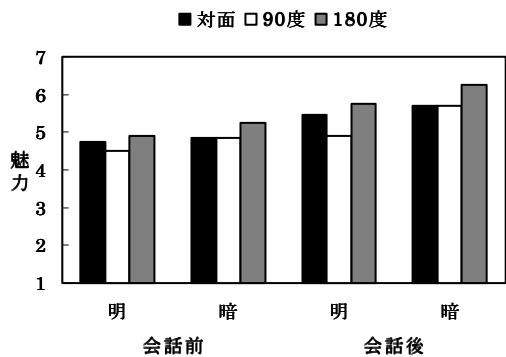


図7 各条件における魅力

ていた実験協力者の魅力は強くなっていた。

考 察

本研究の目的は、初対面の2者の会話状況において、座席の配置および部屋の明るさが発話および会話相手の印象に及ぼす影響を検討することであった。

発話

被験者と実験協力者とが対面して着席した場合、被験者の総発話時間および1発話時間は明るい部屋で長かった。一方、180度の場合、それらは暗い部屋で長く、発話頻度は明るい部屋で多かった。90度の場合、発話に関するいずれの指標も、部屋の明るさによる差異は認められず、また、それらの値は他の2つの条件の間にあることが多かった。すなわち、初対面の2者による会話において、明るい部屋では対面して着席すると発話量は増加し、並んで着席すると短い発話が多くなることが示唆された。一方、暗い部屋では並んで着席すると発話量は増加し、対面して着席すると発話量は減少することが示唆された。また、90度の角度で着席すると部屋の明るさの影響を受けず、一定の発話が行われることが示唆された。

会話相手の印象

会話前より会話後に、被験者が実験協力者に感じていた親しみやすさおよび魅力は強くなっていた。すなわち、初対面の2者が会話を行うことで、会話相手の印象は良好になることが示唆された。

また被験者は、明るい部屋よりも暗い部屋で実験協力者に親しみやすさおよび魅力を感じていた。それに加え、暗い部屋で印象を評定すると、着席する前であっても、被験者は実験協力者の親しみやすさを強く感じる傾向にあった。すなわち、初対面の2者が暗い部屋で会話を行うと会話相手の印象は良好であり、それに加え、会話を行う前からそのような傾向があることが示唆された。

さらに、被験者と実験協力者とが180度の角度で着席した場合に、被験者は実験協力者に魅力を感じる傾向にあった。また、被験者と実験協力者とが対面して着席した場合には暗い部屋で会話をするので、90度あるいは180度の角度の場合には明るい部屋で会話をするので、被験者が感じていた実験協力者の親しみやすさは強くなっていた。すなわち、初対面の2者が並んで着席して会話を行うと、会話相手の印象は良好であることが示唆された。また、明るい部屋では90度の角度あるいは並んで着席して会話をするので、暗い部屋では対面して着席して会話をするので、会話相手の印象が良好になることが示唆された。

総合考察

初対面の2者が会話をするとき、明るい部屋では対面の位置に着席するとコミュニケーション

ンは活発になるが、相手に抱く印象は良好でなくなる。一方、並んで着席するとコミュニケーションの活発さは低下するが、相手に抱く印象は良好になる。それとは逆に、暗い部屋では並んで着席するとコミュニケーションは活発になるが、相手に抱く印象は良好でなくなる。また、対面して着席するとコミュニケーションの活発さは低下するが相手に抱く印象は良好になる。

両者が正面で向き合って十分に視線を交わせるとき、コミュニケーションは促進されることが、Sommer & Ross(1958)および Mehrabian & Diamond(1971a, 1971b)によって示されている。特に未知の者同士の場合、向き合う角度が90度を超える場合、コミュニケーションの積極性は低下し、並んで座ると会話が弾まないことが示唆されている(Mehrabian, 1971 岩下・森川訳, 1981)。本研究でも、明るい部屋においては同様の結果が示された。そもそもコミュニケーションは個人の間を生じる緊張を緩和するために行われる(Newcomb, Turner, & Converse, 1965)。また、沈黙は最も否定的に認知され、特に最大の緊張を生じさせる2者の沈黙は好まれない(大坊, 1990)。明るい部屋で対面して着席したときに発話量が増加した理由の1つは、印象が良好でない会話相手との間の緊張を緩和するためだと考えられる。

一方、暗い部屋では、視線やそれに伴うアイ・コンタクトの効果は抑制されるが、両者の間の距離の効果は維持されることが予想される。Mehrabian(1971 岩下・森川訳, 1981)は、未知の者同士を1室で待機させるという事態を設定し、両者の間の距離が緊張や会話に及ぼす効果を検討している。その結果、2人の距離が近い場合、緊張も増すが同時に会話も多くなることが示されている。それが、暗い部屋では明るい部屋と逆の結果となった理由の1つであると考えられる。

今後の展望

本研究では、暗い部屋で印象を評定するとき、被験者は着席する前であっても会話相手の印象を肯定的に評価していた。親密な関係にある2者を対象とした研究ではあるが、対人関係を肯定的に捉えることでコミュニケーションは増加し、コミュニケーションが増加することでさらに対人関係は良好なものに進展していくことが示唆されている(Noller, 1984)。すなわち、本研究で示された各条件における発話や印象の差異は、座席の配置および部屋の明るさからの直接的な影響だけでなく、発話と印象との相互作用から生じた可能性もある。また本研究では、コミュニケーションの活発さの指標として発話のみを取り上げた。コミュニケーションの活発さの指標には、視線などの非言語的なコミュニケーション行動や会話内容などの指標もある。今後、発話以外のコミュニケーション行動やそれらの相互作用にも着目し、コミュニケーション過程を検討する必要がある。

さらに本研究では、会話を行う2者のうち一方のみを対象としてコミュニケーションの活発さおよび印象を測定している。しかし、2者間のコミュニケーションにおいて、一方が他方に対して一方的に作用するわけではない。会話相手の発話量や自分に対する印象もコミュニケー

ション行動に影響を及ぼすことが示唆されている(黒川・若林, 2003)。また本研究では, 被験者を男性, 実験協力者を女性とした。しかし, コミュニケーション行動には性差が広汎に認められている(大坊, 1986; 1990)。従って, 同性同士のペアも含め, コミュニケーションを行う両者を対象として, コミュニケーション過程を検討する必要がある。

引用文献

- Aiello, J. R. & Thompson, D. E. 1980 When compensation fails: Mediating effects of sex and locus of control at extended interaction distances. *Basic and Applied Social Psychology*, **1**, 65-82.
- Altman, I. 1973 Reciprocity and interpersonal exchange. *Journal for the Theory of Social Behavior*, **3**, 249-261.
- Altman, I. & Taylor, D 1973 *Social Penetration: The development of interpersonal relationships*. NewYork: Holt, Rinehart and Winston.
- Byrne, D. 1971 *The attraction paradigm*. New York: Wiley.
- Carr, S. J. & Dabbs, J. M. Jr. 1974 The effects of lighting, distance and intimacy of topic on verbal and visual behavior. *Sociometry*, **37**, 592-600.
- Chaikin, A. L., Derlega, V. J., & Miller, S. J. 1976 Effects of room environment on self-disclosure in a counseling analogue. *Journal of Counseling Psychology*, **23**, 479-481.
- 大坊郁夫 1977 話題の重要度評定とその因子構造 札幌医科大学医学進学課程紀要, **18**, 1-12.
- 大坊郁夫 1982 二者間相互作用における発言と視線パターンの時系列的構造 実験社会心理学研究, **22**, 11-26.
- 大坊郁夫 1986 対人行動としてのコミュニケーション 対人行動学研究会(編) 対人行動の心理学 誠信書房 Pp.193-224.
- 大坊郁夫 1990 対人関係における親密さの表現: コミュニケーションに見る発展と崩壊 心理学評論, **33**, 322-352.
- 深田博己 1988 インターパーソナル・コミュニケーションー対人コミュニケーションの心理学ー 北大路書房
- Gergen, K. J., Gergen, M. M., & Barton, W. H. 1973 Deviance in the dark. *Psychology Today*, **7**, 129-130.
- Gerstberger, P. & Allen, T. J. 1968 Criteria used by research and development engineers in the selection of an information source. *Journal of Applied Psychology*, **52**, 272-279.
- Gifford, R. 1988 Light, decor, arousal, comfort and communication. *Journal of Environmental Psychology*, **8**, 177-189.
- Gullahorn, J. T. 1952 Distance and friendship as factors in the gross interaction matrix. *Sociometry*, **15**, 123-134.
- 林文俊 1978 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **25**, 233-247.
- Hogg, M. A. & Abrams, D. 1988 *Social identification: A social psychology of intergroup relations and group processes*. London: Routledge.
- Homans, G. C. 1954 The cash poster: A study of a group of working girls. *American Sociological Review*, **19**, 724-733.

- Kahn, A. & McGaughey, A. 1977 Distance and liking: When moving close produces increased liking. *Sociometry*, **40**, 138-144.
- 加藤孝義 1986 空間のエコロジー 新曜社
- 黒川光流・若林美江 2003 2者の対面的コミュニケーションにおいて好悪感情が発言行動に及ぼす影響 富山大学人文学部紀要, **39**, 1-16.
- 楠見幸子 1988 友人関係の各位相に関わる要因について 日本グループダイナミクス学会第36回大会発表論文集, 21-22.
- メーラビアン A. 岩下豊彦・森川尚子(訳) 1981 ヒューマン スペース 川島書店
(Mehrabian, A. 1976 *Public places and private spaces*. New York: Basic Books.)
- Mehrabian, A. & Diamond, S. 1971a The effects of furniture arrangement, props, and personality on social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **20**, 18-30.
- Mehrabian, A. & Diamond, S. 1971b Seating arrangement and conversation. *Sociometry*, **34**, 281-289.
- 宮原哲 1992 入門コミュニケーション論—Communication competence— 松柏社
- Newcomb, T. M., Turner, R. H., & Converse, P. E. 1965 *Social psychology: The study of human interaction*. New York: Holt, Rinehart.
- Noller, P. 1984 *Nonverbal communication and marital interaction*. Pergamon Press.
- Sommer, R. 1959 Studies in personal space. *Sociometry*, **22**, 247-260.
- Sommer, R. 1962 The distance for comfortable conversation: A further study. *Sociometry*, **25**, 111-116.
- Sommer, R. 1969 *Personal space*. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall.
- Sommer, R. & Ross, H. 1958 Social interaction on a geriatrics ward. *Interpersonal Journal of Social Psychology*, **4**, 128-133.
- Sundstrom, E. 1984 Physical environment and social behavior. In K. Deaux and L. Wrightsman, *Social psychology in the Eighties*, 4th ed. Pp.430-457.
- サンドストローム E. ・サンドストローム M. G. 黒川正流(監訳) 1992 仕事の場の心理学: オフィスと工場
の環境デザインと行動科学 西村書店
(Sundstrom, E. & Sundstrom, M. G. 1986 *Work place: The psychology of the physical environment in offices and factories*. Cambridge University Press.)
- Szilagyi, A. & Holland, W. 1980 Changes in social density: Relationships with functional interaction and perceptions of job characteristics, role stress, and work satisfaction. *Journal of Applied Psychology*, **65**, 28-33.
- Worthy, M. , Gary, A. L., & Kahn, G. M. 1969 Self-disclosure as an exchange process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **13**, 59-63.

注

- 1) 本研究のデータ収集にあたってご協力いただいた水上祐子氏(2003年度富山大学人文学部卒)に謝意を表します。